未来を拓く心のブック

市民版

未来を拓く心のブックの刊行にあたって

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分に発生した東北地方太平洋沖地震では、私たちの住む郡山市も最大震度六弱を記録しました。その後、東京電力福島第一原子力発電所の事故が重なり、地震、原子力発電所事故、風評被害が、私たちのそれまでの生活を一変させました。震災当時は、物流がストップしたため、商店の陳列棚からは商品がなくなり、ガソリンの供給も制限されるなど日常生活に大きな支障をきたしました。さらに、子どもたちは、目に見えない放射線への不安などのため、一緒に学びスポーツを楽しんだ友達との突然の別れの悲しみも経験しました。

このような厳しい状況の中でも、私たちは秩序を守り、互いに助け合い、たとえ離れても励まし合って苦難を乗り越えてきました。震災後には、全国各地や世界の国々から心温まる励ましのメッセージをはじめ、多くの支援物資や復興への協力を得ることにより、私たちは、人々の絆のありがたさや善意を体感しました。これらの経験から、子どもたちは「生かされている自分」「支えられている自分」というものを改めて感じたことでしょう。

そこで、東日本大震災の被災をとおして経験したこと、考えたこと、気づいたことなどから、子どもたちが何を学び、何を語り継ぐべきかを記録として残すことは震災を経験した者の大切な使命と考え、「未来を拓く心のブック」を作成することといたしました。

この趣旨のもと、市民の皆様から広く作品を募集したところ、約八百四十点の作品が寄せられました。その一つ一つの作品には、「震災をどう乗り越えていったか」「この経験を通して自分の考えや行動はどのように変わっていったのか」という震災をとおして改めて考えたことや、自分自身の変化などが素直に表現されており、そこからは、苦労や辛い日々の思いを分かち合い、未来へ向けた前進への強い思いを感じ取ることができました。

本作品集は、市内全児童生徒に配付し、道徳の時間等で活用するとともに、市内の全家庭に配付いたします。尊い体験を共有することができるこの作品集が、未来の郡山を力強く切り拓く市民の皆様や子どもたちの精神的支えとなり、真の復興を成し遂げる原動力となることを願っています。

平成二十六年三月

郡山市教育委員会教育長　木　村　孝　雄

目次

一　東日本大震災の記録 …… 4

二　主な応募作品

じしん …… 16

絆 …… 18

つよさ …… 20

いつもの公園 …… 21

ぼくの気持ちが変わった時 …… 23

友達 …… 26

きれいな音を届けたい …… 28

ばあちゃんの野菜 …… 31

希望 …… 34

ふくしまで生きる …… 36

『大丈夫』 …… 40

幸せな「平凡な生活」 …… 43

三　小学校道徳資料

少しでも福島の力に …… 48

四　中学校道徳資料

ワイルドストロベリーの実 …… 54

選考・作成委員 …… 58

※平成二十三年度と平成二十四年度の作品には、制作時の学校名と学年を掲載するとともに、制作年度を作品の終わりに明示しました。

※道徳資料については、応募していただいた作品をもとに、選考作成委員で一部書き直しをしました。

一　東日本大震災の記録

震災の記録とこれまでの歩み

『復興への階段』復興モニュメントデザイン委員会（市内中学生の代表により構成）

平成23年3月11日14時46分
東北地方太平洋沖地震発生

～これまでに経験したことのないすさまじい揺れが東日本を襲いました～

郡山市　最大震度　6弱

この地震は、最大震度7の強い揺れとその後の大津波により、多数の死者・行方不明者を出すなど、東北・関東地方を中心とする広い範囲で、甚大（じんだい）な被害をもたらしました。郡山市でも、震度6弱の激しく長い揺れによって、建物や塀などの倒壊、道路の亀裂や断水などの被害が発生しました。

震災直後の郡山市内

図書館では、本が落ちるなどの被害がありました。

地震の直後、急に暗くなり、吹雪になりました。その後も、断続的に余震が続きました。

道路には、ひび割れや陥没が多数発生しました。

震災直後、たくさんの人が避難所で生活しました。開成山野球場も避難所になりました。

民家のかわら屋根などにも大きな被害が出ました。

震災直後の市民生活

避難所には、ボランティアの方が多数訪れ、炊き出しなどが行われました。

給水を求める市民の列ができました。整然と並ぶ様子に、海外のメディアから賞賛の声が寄せられました。

水道管の復旧に向けて、夜通しの作業が続きました。

物流がストップし、商店の棚から商品が消えました。

全国各地から救援物資が届けられました。

避難所を訪れた様々な方から激励をいただきました。

ホールボディカウンターによる内部被ばく検査が行われました。

小中学校の校庭では、表土除去が行われ、校庭の土がたくさん削られました。

原子力災害への対応

食の安全のため、小中学校では給食に使われる食材の徹底した検査が行われています。

市内の学校や公園などに設置されたモニタリングポストなどにより放射線量を測定し、その数値を公開しています。

町内会やPTAをはじめとした市民の協力により通学路の除染活動が行われています。

震災後の学校の様子

地震の影響で、体育館が使用できなくなってしまった学校もありました。

市内の多くの学校の建物にも被害が出ました。

市内の全ての小学校では、３月31日に卒業式を実施しました。

入学式は、学校ごとに様々な工夫をこらして行いました。多目的ホールや廊下などを会場にした学校もありました。

放射線対策のため、各学校では窓を閉めて授業を行っていました。そのような中、夏の暑さを防ぐため、郡山市から各学校へよしずと扇風機が配付されました。

中学校では、校庭での部活動が制限された時期があり、教室や廊下を利用して練習をしていました。

震災のあと運動会は体育館を使って行う学校が多く見られました。

国内外からの応援メッセージや支援物資

たくさんの支援物資が国内外から届けられ、学校へも配布されました。

鳥取市の小学生から応援メッセージが届きました。

復興に向けて

郡山市元気な遊びのひろば「ペップキッズこおりやま」が郡山市横塚にオープンしました。

子どもたちは、「ペップキッズこおりやま」で思う存分遊ぶことができるようになりました。

郡山の伝統的な祭り「うねめまつり」には多くの市民が集まりました。

二分の一成人コンサートでは、市内の四年生が集まって、みんなで音楽を楽しみました。

郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクトチーム設立

親子での室内遊び

「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクトチーム」を立ち上げ、子どもの心と体のケアに取り組んでいます。

絵本の読み聞かせ

子どもたちが明るく健やかに成長するための環境作りを一層推進します。

歩みだした郡山市

がくとくん・おんぷちゃんはいつでも子どもたちの人気者です。
元気いっぱい郡山市をPRします。

避難所として使われていた開成山野球場でプロ野球の試合が行われるようになりました。

磐梯熱海スポーツパークで開催されたLIVE福島風とロックSUPER野馬追に多数の有名ミュージシャンが駆けつけ、日本中に、世界中に、今の福島を伝えました。

海老根和紙の灯篭600個に点灯。東日本大震災からの復興への願いや未来への希望を込めた郡山市教育委員会主催の「春蛍」がJR郡山駅西口駅前広場で開かれました。

小学校の様子

震災直後は体育館等の屋内施設を使っての運動会が多かったのですが、今ではほとんどの学校が校庭で以前のように運動会を行うようになりました。

わくわく湖南移動教室では、郡山市内の全ての小学生が、湖南町での自然体験活動を行いました。

中学生に負けないくらい合奏、合唱もがんばっています。

除染を終えた小学校のプールにはたくさんの歓声がもどってきました。

おいしい給食を食べる子どもたちの笑顔いっぱいの教室。

陸上競技交歓会は平成24年度から再開されました。市内の六年生が開成山陸上競技場に集まって、練習の成果を発揮しました。

中学校の様子

楽都郡山を象徴するように、中学校の合唱部や吹奏楽部、管弦楽部が各種コンクールで活躍しています。

美しい日本語表現コンテストでは、中学生のみなさんが、文化センターのホールいっぱいに美しい日本語を響かせていました。

子どもたちのとびきりの笑顔がみんなを元気にします。

未来を拓く郡山の子どもたち

様々な困難を乗り越えながら、中学生は今、部活動に取り組んでいます。

二　主な応募作品

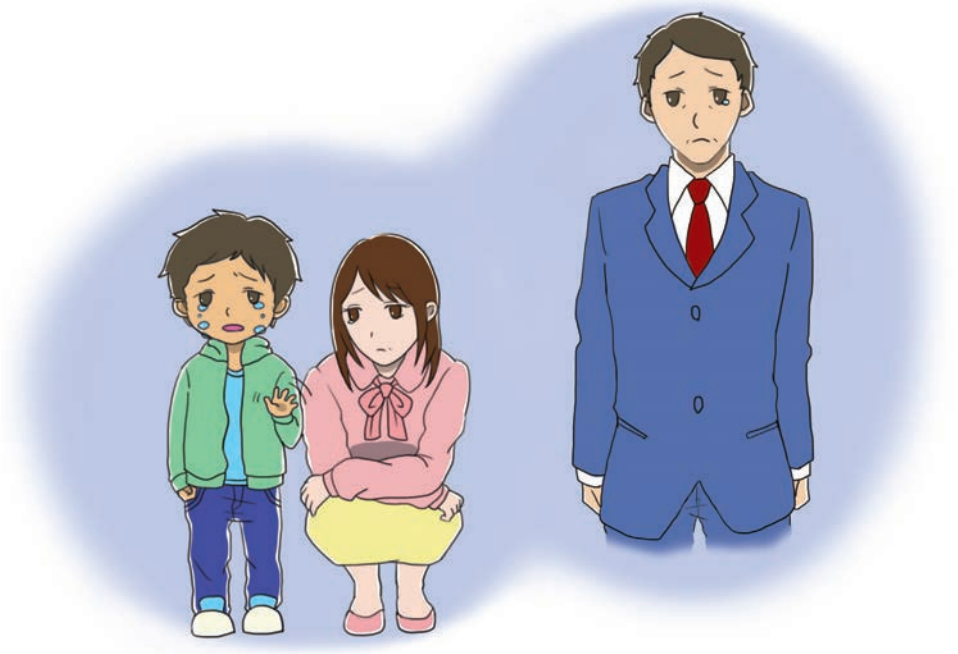
じしん

郡山ザベリオ学園小学校　一年　まつもと　じょうたろう

ぼくが三さいだったとき、大きなじしんがきた。とてもびっくりした。はだしでそとに出た。たっていられないぐらいグラグラしていた。ないているおともだちもいた。

じしんがあった日から、お水が出なくなった。まい日、あたりまえに出ていたのに、出ないなんてふしぎに思った。

じしんもこわかったけど、ほうしゃせんがとんでくるときいて、もっとこわくなった。今は、ほうしゃせんのことはわかるけど、そのときは、はじめてきいたことばだったからだ。それで、ぼくはママとひこうきでとおくにいくことになった。パパはおしごとがあるから、いっしょにはいけなかった。空こうで、はじめてパパがないたところを見た。ぼくのことがし



んぱいだったからだとおもう。ぼくもいっぱいなみだがでた。

それからパパとはなれてくらすことになった。ほうしゃせんなんてなくなっちゃえとおもったけど、いっぱいあたらしいおともだちができた。

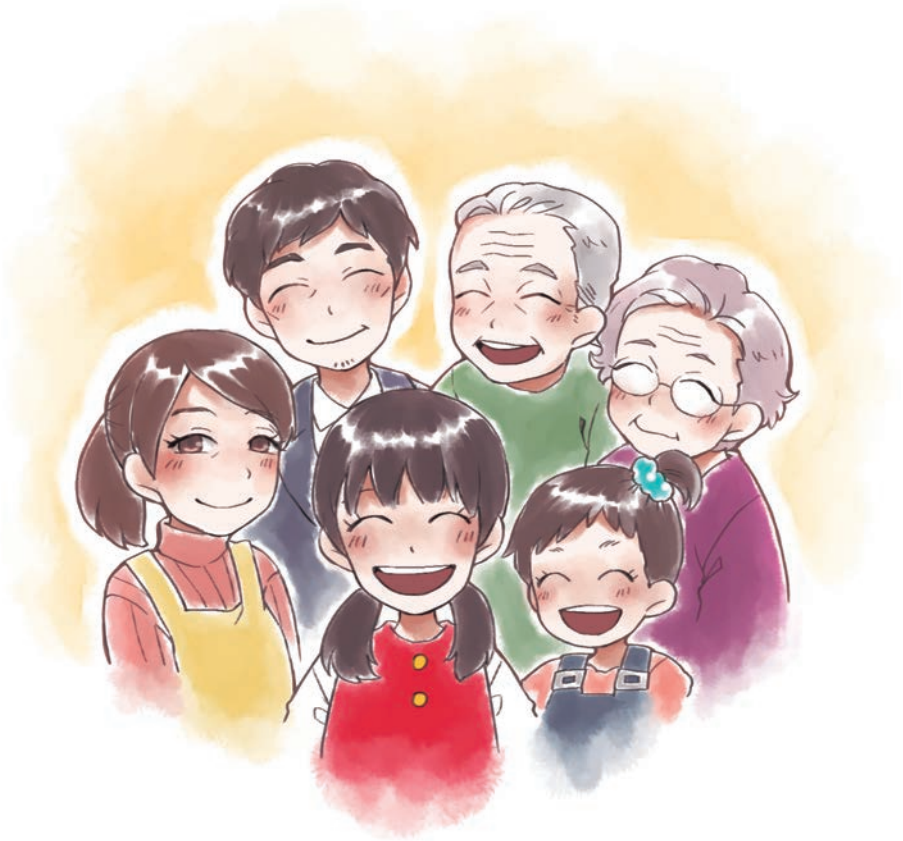
今は、まえみたいにこおり山でかぞくみんなでくらしている。やっぱり、みんないっしょがいい。パパとマラソンたい会にも出たし、うんどう会も校てい でやった。まい日すごくたのしい。

もっともっと、ほうしゃせんがなくなれば、もっとたのしいんだろうな。

絆（きずな）

平成二十三年三月十一日
地しんがきた
大きな大きな地しんだった
こわかった
不安だった
なんだか　くやしかった

でも
家族は　いつもいっしょだった
お父さんも
お母さんも
がんばっていた



郡山市立大槻小学校　三年　西條　桜

小さな妹も　がんばっていた
友だちも　がんばっていた
みんな　がんばっていた

日本中のみんなから
世かい中のみんなから
思いやりと勇気を
たくさんもらった

一人じゃない
絆の意味を知った

つよさ

つよいってことは
まけないってことじゃない
つよいってことは
なかないってことじゃない

つよいってことは
まけても
あきらめないこと

つよいってことは
ないても
またわらえること

郡山市立小原田小学校　三年　濱津息吹

いつもの公園

郡山市立安積第三小学校　四年　秋津　みゆき

いつもの公園
かけてゆく
近所の友だち
大集合

あの日から　かわってしまった
目の前のブランコ　遊べない
みんなの声も　聞こえない
いつもの公園　さびしそう

当たり前じゃなかったんだね

あれから二年
友だちの声が　聞こえてきたよ
いつもの公園　うれしそう

ぼくの気持ちが変わった時

郡山市立富田小学校　五年　長崎　孝佑

三月十一日、二時四十六分。学校帰りに、小さな風とともに地しんが起きた。立っていられないほど、地面がものすごくゆれた。雪も降ってきた。とてもびっくりした。こわかった。登校班の班長が向こうから来て、

「校庭に行って。」

とさけんだ。ぼくたちは、急いで校庭にもどった。しばらくすると、母と姉がぼくをむかえに走って来てくれた。母と姉の姿を見た時、心の中でほっとした。とてもうれしかった。

家に帰ったら、いろいろな物がたおれていて、とてもびっくりした。ぼくは、母と落ちている物をたくさん拾い、元にもどした。

父とは連絡が取れなかったので、とても心配した。夜おそく帰ってきた父に会えた時は、とてもうれしかった。家族みんなで食べた夕ご飯は、今までにないくらいおいしかった。余しんが来ると、みそ汁がゆれ、とてもこわかった。でも、家族がいるだけでうれしかったし、心がとても温かくなった。

しかし、その後、津波がざぶんざぶんと町におそいかかるのをテレビで見て、すごくこわいと思った。その様子は、言葉では表せない。たくさんの命が、目の前でうばわれていってしまった

から。さらに、その後に起こった原発の事故。ぼくたちは、外で遊ぶこともできなくなった。

この日から、ぼくの気持ちが変わった。家族は、何より大切なのだと。そして、家族だけでなく、ぼくたちをひなんさせてくれた登校班の班長。家の人が来るまで見守ってくれた先生。食べ物を分けてくれた近所の人たち。たくさんの人に支えられ、はげまされて、ぼくたちが過ごさせてもらっていることを知った。

朝の集団登校で横断歩道に立つお母さんの姿や、ぼくの前に立つ班長の姿を、今までは当たり前のように見ていた。深く考えずに過ごしていた。でも今はちがう。地しんは、ぼくに大切なことを気づかせてくれたように思う。

ぼくは考えた。そして、決めた。ぼくに

できること。それは、自分のことを自分でしっかり行うこと。そして、学級の友達や下学年の友達のために行動すること。

その後、五年生になり、運動会の準備が始まった。ぼくは、運動会実行委員になった。初めは不安だったけれども、六年生との話し合いに参加して、一生けん命に話を聞いた。仕事の内容が分かってくると、だんだんうれしくなってきた。そして、話し合いで決まった内容を、学級の友だちに分かりやすく伝えた。ぼくの話を一生けん命聞いて、協力してくれる友だちの姿が、ぼくをより力強くはげましてくれた。

昼の校内の放送では、時間に遅れないように放送室に行き、スローガンを決めるアンケートの書き方や集める方法を、一年生にも分かるように、ゆっくりとアナウンスした。全校から集まってきたアンケートを集計して、スローガンが決まった時は、今まで味わったことのないような温かい気持ちが心の中にわいてきた。

ぼくは、今までしてもらうことが多かった。でも、これからは、小さなことでも、不安があっても、一つずつ、一つずつ、しっかりと行動していきたいと思う。その積み重ねで大きくなったぼくの力を、たくさんの人のために役立てることができたらいいなあと思う。家族の中でも、友だちの中でも。支えてもらい、支えていけるように。

友　達

郡山市立桃見台小学校　五年　谷　　優　太

原発事故が起きて、ぼくたちは外で遊べなくなりました。お父さんとお母さんは、たくさん話し合って、お母さんとお兄ちゃんとぼくと弟で、茨城(いばらき)県水戸(みと)市のおばあちゃんの家に避難することになりました。桃見台小学校から水戸市の新荘(しんそう)小学校に転校するときは、「桃見台小学校にいたいのにな。」とさみしく思いました。

初めて新荘小学校に行った時は、とてもきんちょうしました。でも、みんながぼくをかんげいしてくれて、とてもうれしかったし、ほっとしました。友達もすぐにできました。放課後も、友達にさそわれておにごっこやサッカー、くつ投げをしました。夏には、水てっぽうで遊びました。時には、友達とけんかをしてしまったり、ふざけて先生におこられたりしたけど、たんにんの先生はおもしろいし、特に体育の先生がたくさん遊んでくれて、毎日楽しかったです。

習い事もたくさんしました。郡山で通っていた水泳はもちろん、バスケットボールとそろばんを初めて習いました。特にそろばんは早く進級できて、みんなにほめられてうれしかったです。

時々、桃見台小学校の友達はどうしているかと心配になりました。桃見台小学校のホームページの記事が新しくなると、お母さんが教えてくれて、自分の学年の記事が早く見たくて見たくて、兄弟でパソコンの取り合いになりました。そして、友達の様子を見ると、郡山に帰りたいと思いまし

た。福島県に一人で残っているお父さんが、かわいそうだなと思いました。

ひなんして半年がすぎると、二週間に一回は福島県に帰ってきて、郡山の友達と遊びました。久しぶりでも、いつもと変わらず遊べて楽しかったです。

しん災から一年十か月たって、お兄ちゃんの進学もあり、ぼくたちは福島に帰ることになりました。福島にひっこす前の日に、クラスのみんながお別れ会を開いてくれました。くす玉を作ってくれたり、手作りのカレンダーやみんなでとった写真を入れた写真立てをくれたりしました。最後の最後の時に、友達に泣きながら、

「また遊ぼうね。」

と言われて、また必ず帰って来ようと思いました。

しん災でひなんすることになった時、ずっと桃見台小学校にいたいと思ったけれど、新荘小学校でたくさんの友達ができて、楽しいこともたくさんありました。思い出もたくさんできて、ひなんも悪くなかったなと思いました。

これから、もしまたつらいことがあっても、どんなに大変な時でも、悪いことばかり、いやなことばかりじゃないと思えるので、前を向いてがんばっていきたいです。

きれいな音を届けたい

郡山市立明健小学校　六年　宗　形　桃　子

三月十一日、東日本大震災がおきました。地面が大きくゆれ、かわらが落ち、私たちの町が壊されました。断水と停電が続き、不便で不安な生活がしばらく続きました。でも、もっと大変な問題、東京電力福島第一原子力発電所の事故が起こり、放射線問題が私たちを今でも苦しめています。

県内の多くの人が住む町を追われ、知らない町へ避難しました。私の友達の中にも、県外に引っ越した人がいます。あの子は今どうしているのだろうと考えると、とてもさみしい気持ちがこみ上げてきます。

ニュースを見ると、毎日毎日、放射線の数値や除染の問題が流れてきます。野菜などから放射性物質が検出されたとか、側溝の放射線量は高いとか、心配なニュースばかりで、とても悲しく思います。いろいろな情報が飛び交い、制限された生活を送っている私たち、それでもこの町から出ることはせず、普通の生活を送っています。いえ、送ろうとがまんしている、がんばっているのです。それは、自分の生まれたこの町が、一緒に暮らす家族や友達が何よりも大切だからです。

でも、いつまでも悲しんでため息をついて生きていきたくはありません。こんな中でも自分にできることを一生懸命にやり、自分らしく生きていかなければと思います。私は、今私にできることはないか、どんなことができるのか考えました。それは特別なことではなく、きっと普通の生活を

心がけることだと思います。勉強をがんばること。友達と思いっきり遊ぶこと。困った人が近くにいたら手をさしのべること。そして、震災の時に優しい気持ちを私たちに向けてくれた人たちに感謝の気持ちを持ち続けることです。そして、私にはもう一つ、「音楽」があります。

去年の冬、私の所属するオーケストラは、県内の養護学校でコンサートを開きました。その時に感じた温かい気持ちを、私は忘れることができません。

演奏の途中で、養護学校の友達が指揮を体験するコーナーがありました。私たちはその指揮に合わせて演奏をしました。オーケストラの団員と養護学校の友達みんなの心が一つになったと感じました。

私の楽器はコントラバスです。一人の目の不自由な男の子が私の所にやって来ました。コントラバスに触ってみたいとのこと。男の子は楽器全体を手でなぞるように触れ、弦に耳を近づけて音を確認していました。普段めったに笑うことのない男の子が、私の楽器に触ってうれしそうに笑ってくれたことに、私は、ここで演奏ができてよかったと心の底から思うことができました。その男の子の笑顔は、私に優しく温かい気持ちを与えてくれました。

音楽には、人を元気にする力があると思います。

人の心をいやす力があると思います。人と人を結びつける力があると思います。

まだまだ原子力発電所の事故の不安が残るこの地で、平常心を保ち、いつものように生活しているように見える私たち。しかし、本当はいつも心のどこかで、放射線におびえていることは、隠せない事実です。それでも、このような土地でも、私はこれからもずっとこの町で音楽を続けていきたいと思います。私の奏でる音で、一人でも多くの人に元気や勇気を届けたいと思うのです。

音楽は、人を元気にする。人の心をいやすことができる。人と人とをつなぐことができるということを私は信じ続けます。そのために、一生懸命に練習し、きれいな音、力強い音を出せるようにがんばりたいと思います。

これが、私の今やらなければならないことです。そして、きっと自分のためになることだと思います。

（平成二十三年度作品）

ばあちゃんの野菜

郡山市立小泉小学校　六年　樽井典子

ばあちゃんは、野菜作りがとても上手だ。
夏になると、ナス、キュウリ、カボチャ、
いろいろな野菜料理を食べる。
ナスは油いため。キュウリはつけもの。
カボチャはにもの。
家族みんなが大好きな料理だ。
ばあちゃんの作った野菜は、
どれも新せんでみずみずしく、
とてもおいしい。

二年前、ばあちゃんは、
せっかく作った大事な野菜を全部捨てた。

放射性物質のえいきょうを心配したからだ。
畑を耕してなえを植え、水をやり、
食べられそうになったのに。
「今年は食べられない。買うしかないね。」
と言ったばあちゃんは、
とてもがっかりしていた。
買ってきた野菜は、
ばあちゃんの野菜よりもかたかった。

一年前、ばあちゃんは、
また野菜を育てた。
私も世話を手伝った。
放射性物質の検査をして安全を確かめ、
今度は畑で作った野菜を
食べられるようになった。
ばあちゃんの野菜はとてもおいしく、
家族みんなが、笑顔になった。

今年、ばあちゃんは、
また野菜を育てている。
「ばあちゃんのように
　最後まで何かを育てたい。」
そう思って私は、
畑のあいているところに
ヒマワリと百日草の種をまいた。
花が咲いたら、
畑に行ったばあちゃんが
見てくれるだろう。
ばあちゃんが花を見て
喜んでくれたらいいな。
花を見たみんなが
笑顔になってくれたらいいな。

希　望

あの日はとてもこわかった
世界が終わってしまいそうで
体験したことのない大きな地震が
私たちを闇にのみこんだ

あの日はとても切なかった
希望の光が見えなくて
さからうことのできない地震に
私たちはただおびえているだけ

でも明るい希望の光は見えてきた
世界中からの救いの光が

郡山市立御舘中学校　二年　天野綾香

私たちを闇から助けてくれた
だから私たちはもう負けない
どんなことが起きてもあきらめない

次に救いの光になるのは私たち

ふくしまで生きる

郡山市立小原田中学校　二年　吉　田　一　翔

十三歳の春に僕たちのまちを襲った東日本大震災から半年。未だに余震が続き、あの時の不安と恐怖が心を揺らす。突然、地の底から突き上げるようなズズズと鈍い震動を感じる時、僕の体と心が拒否反応を示す。胸がしめつけられそうになる。もうあの日のことは思い出したくない。

地震が来たら、まち全体がふわっと浮き上がって揺れを避けることができたらいいのになあと、夢のようなことを考えて現実から逃げたくなる。小学三年の頃の理科の実験を思い出す。磁石の実験だった。赤いN極同士をくっつけようとすると、反発してふわっと浮いたような感触があった。磁石の反発で地震から逃れることができたらいいのに。

あの日を境に、テレビの画面が一変した。毎週楽しみにしていた番組は消え、見慣れたコマーシャルも画面から消えた。替わりに「心は見えないけれど心づかいは見える。思いは見えないけれど思いやりはみえる。」というコマーシャルが飛び込んできた。震災直後の痛んだ心に、じいんとしみた。家族の絆・友達同士の励まし合い・近所の人の援助。一生かかって経験するようなことを十三歳の春にわずか数日間で経験したような気がする。温かい心遣い、思いやりに、今でも感謝の気持ちでいっぱいだ。

さらに、画面に映し出される見慣れぬ映像、聞き慣れない言葉に、僕は釘付けになった。灰色の

作業服。初めて聞く原子力保安院。そんな組織があったんだ。燃料棒。原子炉。格納容器。メルトダウン。海水注入。モニタリング。マイクロシーベルト。難しい装置図でテレビ画面は埋め尽くされた。専門家が、専門的なデータを、専門用語で読み上げ、専門家だけが理解していることを、僕たち社会に対して発信していた。今何が起こっているのか。爆発するのか。どこに逃げたらいいのか。僕はどうしたらいいのか。全くわからなかった。テレビ画面が伝える専門家の情報は、僕には理解できなかった。

十四歳になった僕は、「風評被害」という言葉を初めて知った。中学二年になった五月、学習旅行で会津に行った。一年生の時も会津だった。二度目の会津は、町の様子が違っていた。去年は飯盛山や鶴ヶ城の駐車場に同じ車体の大型バスがずらりと停まっていて、自分の乗るバスを探すのに苦労したのに、今年は、止まっているのは僕たち小原田中のたった四台のみ。町中を班別研修で歩いていた時も、去年は違う形・色の制服を着た他校

生をたくさん目にしたのに、今年すれ違うのは、見慣れた制服の仲間ばかり。風評被害は、福島県の観光にも、農作物にも暗い影を落としている。教室の窓から田んぼが見える。震災を乗りこえて、たわわに実った稲穂が、僕には誇らしげに見える。「どうか、この米が風評被害にあいませんように。」と僕は祈る。

夏休みを終え、二学期が始まった。教室にいたはずの友が転校していた。放射能汚染から避難するため、自分の意に反して転校していった友。一緒に机を並べて学び、学習旅行でも同じ班で時間を共にした。サッカー部の僕が練習するすぐ隣の体育館でバスケットボールを追っていた彼の姿が思い浮かぶ。小原田中のユニフォームを着て中体連大会に出たかっただろうに。あいつの分もがんばらなくては。今、屋外での活動制限三時間。マスク着用。思いっきり空気を吸って、思う存分走りたい。伸び伸び部活動ができない毎日にストレスがたまる。イライラしてくる。心が折れそうになる。その度、「辛いのは僕だけじゃない。今は、ふくしまみんなが辛いんだ。」「ふくしまみんなが踏ん張っているんだ。」と自分を制し、自分を励ます。

今の僕にできること。それは、当たり前に勉強をがんばり、当たり前に部活動に励み、普通の学校生活を送ること。当たり前のことに日々感謝すること。「当たり前」がこんなにも貴重で幸せなんだと身をもって知った。

ふくしまで生まれ、ふくしまで育ち、今ふくしまで生きている。そして、これからもふくしまで生きていく。相田みつをさんの詩「いのちの根」のように、いのちの根が深く強くなるまで、僕はこの地で生きる。

僕にとってふくしまで生きるとは、僕自身がたくましく太い根になり、成長を続けること。そして、大空に向かって幹を伸ばし、枝を広げるように、将来の目標に向かってまっすぐに伸びていくこと。視野を広げていくこと。やがて、大人になった時、僕は、前を向き必死に生きる人々の力になっていきたい。

「うつくしま　ふくしま」を取り戻すまで、僕はふくしまで生きる。よみがえった「うつくしま　ふくしま」をこの目で見届ける。

（平成二十三年度作品）

『大　丈　夫』

郡山市立郡山第一中学校　三年　阿　部　菜　紅

小学校の卒業式を十日後に控え、式歌や呼び掛けの練習を重ねていたあの頃。いつものように仲良しの友達と楽しく帰っている途中に、立っていられないくらいの激しい揺れが襲ってきた。恐怖に震え、泣き叫び、ただただ家族の無事を祈ったあの時。それまで晴天だった空が一変し、狂ったように舞い散る雪が不気味に感じられた。今思えば、それまでの当たり前の生活が崩れていく予兆だったのかもしれない。

その後の東京電力福島第一原子力発電所の水素爆発。誰もが未知の世界で、不安な毎日だった。友達はほとんど遠くに避難した。外で体を動かすことが大好きな私。でも、外出を禁止され、私の心も爆発しそうだった。

卒業式を明日に控えた日の夜、ＰＴＡ会長さんから「ランドセルを寄付していただけないでしょうか？」と連絡が入った。ビッグパレットに避難されている小学生に寄付したいとのことであった。でも、「嫌だな。」と思う自分がいた。なぜなら、私が使っていたのは兄のランドセルであったからだ。卒業まであと半年だというときに、私のお気に入りのランドセルが壊れてしまった。わざわざ買うまでのこともないので、兄の黒いランドセルにピンクのカバーをつけて使っていた。兄の六年間の思い出がたくさん詰まっていると思うと、手放したくない思いが強かった。私は、

「お兄ちゃんがよいのなら」
と答えたが、内心は、
「お兄ちゃん、断れ断れ」
と願っていた。でも兄は、
「誰かの役に立つなら喜んで寄付するよ。」
と答えた。それだけではなく、集まったランドセルをきれいに磨き、段ボールに詰める手伝いまでかって出たのだ。そんな兄をすごいと思った。

延期になった卒業式は時間を大幅に短縮してとり行われた。毎年、素敵な着物姿の先生方を楽しみにしていたが、残念ながらそれもなかった。何かあったときにすぐに対応できるようにとの、先生方の温かい配慮だったに違いない。練習した三曲の式歌は一曲だけ歌い、呼びかけを披露する機会は失われた。だが、どんな形にしろ、卒業式を挙行していただいたことに心から感謝した。

そして、卒業式の翌日。集まったランドセルの数にただただ驚いた。山のように重なった色とりどりのランドセルは、温かい優しさの象徴だと感じた。一瞬でも反対した自分が恥ずかしかった。六年間、共に過ごしたランドセル。そんなランドセルを寄付してくれた薫小学校の卒業生。みんな

と小学校生活を送れたことを誇りに思った。
卒業生を代表して、ランドセルを渡すためにビッグパレットに行くことになった。
「卒業したばかりのランドセルが、また入学できて嬉しいです。」
その時に感じた思いを素直に伝えて、渡すことができた。私が渡した相手は、四月から小学校に入学する女の子だった。手渡したランドセルをすぐに背負い、振り向いては何度もランドセルを確認する姿がかわいかった。避難区域にある自宅には、きっと真新しいランドセルが準備されていたことだろう。それでも、使い古しのランドセルをニコニコ嬉しそうに見つめている。
「寄付してよかった。」
と心からそう思えた。
今、私は担任の宍戸先生の最後のお話を思い出している。黒板に書かれた『大丈夫』の言葉。どの文字にも、支え合っている意味の「人」の漢字が含まれていることを教えてくださった。
震災によって当たり前の日常が奪われたが、だからこそ、触れることのできた優しさがある。私たちはいつもたくさんの人の優しさに支えられて生きている。そんなみんなと心は一緒なのだから、この先もきっと『大丈夫』。この教えを決して忘れずに生活していこうと思う。
そして、この先もまた困難な出来事が襲ってきたら『大丈夫』『大丈夫』そう言い合いながら乗り越えていきたい。

幸せな「平凡な生活」

郡山北警察署　高　橋　　眞

平成二十三年四月七日、県警は警視庁機動隊の応援を受け、東京電力福島第一原発から半径二十キロ圏内の南相馬市原町地区での大規模捜索を開始し、四月十四日に半径十キロ圏内で部隊を投入しての大規模捜索を開始しました。

自分の五十三歳の誕生日に半径十キロ圏内の捜索が開始され、捜索班に指名されたことに天命を感じ、自分がこの世に生を受け、自分の人生を生きてきて最も意義のある時が来たと思いました。

私は、派遣前日すぐには眠れませんでした。派遣に意義を感じながらも、一方で原発から十キロ圏内に入る自分は、どれだけ被ばくするのだろうか、自分にも家族がいる、自分が被ばくしたら家族はどうなってしまうのだ、と考えていたのです。

当時の国家公安委員長は記者会見で、我々の十キロ圏内での捜索を「勇気ある決断をし敬意を表したい」と話していました。

私が捜索に入った浪江町は、地震で道路のいたるところで陥没や地割れが残っており、瓦や塀の残骸(がい)が散乱して静まり返っていました。震災から一カ月が経っていましたが、ここだけは時間が止まっていました。

請戸(うけど)地区の捜索は三百人体制で実施され、我が班は、瓦礫(れき)の中に親子と思われる成人男性と男の子のご遺体を発見しました。二人は、寄り添うようにして亡くなっており、津波に襲われる直前に父親が我が子をかばって抱きかかえているように見えました。

私には娘がいます。私はこのご遺体を前にして、私もきっと娘をかばって抱きかかえただろうと思うと、涙が止まりませんでした。今まで、警察官として何度となくご遺体を見てきても涙を流さなかった自分が、我が身を犠牲にしても子を守ろうとする父のご遺体と、父を信じ頼る子のご遺体を見て、職務を忘れ涙を流したのでした。

他の班員も私と同じ気持ちだったのだと思います。

現場に、遺体搬送班を待つ三人を残し、みんな足早

に次の捜索へと移って行きました。

今回の避難指示により、避難児童を受け入れた郡山市内のある小学校の校長先生が、被災状況を確認するために同校を訪れた際に私に向かって、「普段の何でもない平凡な生活を送れることは幸せだったんですね」と話しかけてきました。

震災という非常事態を受け、休むのも忘れて管内での警戒活動に取り組んでいた私は、この被災地の人々の心情を端的に表現した言葉を聞き、自分も被災者の一人だったのだなと再認識することになったのでした。警察官であり被災者でもある自分は、生涯この言葉を忘れてはいけないと思いました。

（平成二十四年度作品
「ふくしまに生きる　ふくしまを守る」より）

三　小学校道徳資料

少しでも福島の力に

平成二十三年三月十一日（金）午後二時四十六分、宮城県、福島県沖を震源としたマグニチュード九・〇という大きな地震が発生しました。

東日本大震災です。

ここ郡山市でも震度六弱という強い揺れに襲われ、建物が押しつぶされたり、屋根の瓦が落ちたり、道路が壊れたりといたるところで大きな被害を受けました。家の中の家具がたおれ、ガラスが割れ、学校の体育館などに避難して夜をあかす人たちもいました。

この地震でたくさんの人が亡くなったり、けがをしたりしました。

その時わたしは、小学三年生でした。

地震の揺れがおさまって何分か過ぎ、安全だと分かり家に入りました。あたりを見わたすと、クローゼットがたおれていました。台所を見てみると、お皿がわれていました。たった数分間の間にこんな事が起こるなんて、この地震がこれからずっと続いたら、世界は終わってしまうんじゃないかと思いました。

しばらくして、テレビがつきました。でもだいたい流れているのはＣＭだけでした。それにニュースばかりでいつも放送されている番組はやっていませんでした。ふとテレビのニュースを見ていると、けがをした人などの映像が目に映りました。

（みんな、だいじょうぶ？　死なないで……。）

わたしはとても心配になりました。

いろいろな所のニュース映像の中に、頭にほうたいをまいている人、たんかで運ばれている人、横になって治療を受けている人がいて、さらにその人たちに寄りそうお医者さんの姿がありました。

お医者さんたちは、自分のことはかえりみず、大切な命を救おうと懸命に働いていました。そこ

からは、どんな状況であっても、ただただ人の命を救いたい、痛みをやわらげたいという強い気持ちが伝わってきました。

しかし、お医者さんの人数はわずかで、大勢のけがをした人たちが痛みにたえ、早く助けてもらいたいと、待っているようでした。

「助けたい。」

わたしは、この映像を見て、思わず声を出してしまいました。この時、生まれて初めて何のつながりもない人を心から「助けたい」と強く思いました。

わたしの夢は、前からお医者さんになるということでした。ただそれは、しっかりとした理由もなく、ただ何となく思っているものでした。しかしこの時から、お医者さんになるという夢を人に堂々と言えるようになりました。

それから二年が過ぎ、わたしは六年生になりました。わたしの気持ちは今でも変

わっていません。それにお母さんから「今、福島ではお医者さんが不足している」ということを聞いています。わたしは、必ず医者になって、少しでも災害で苦しんでいる福島の人たちの力になりたいと強く思い、日々勉強に励(はげ)んでいます。

（郡山市立御舘小学校　六年　古川　若奈さんの作品）

◇　医者になるという夢を人に堂々と言えるようになったのは、どうしてでしょう。

◇　みなさんは、どんな夢や目標を持っていますか。

四　中学校道徳資料

ワイルドストロベリーの実

「赤い実がなったよ。」

そう父が言ったのは今年の六月中頃のことだった。私は外へ一目散に駆け出した。庭の手入れをしていた父が、ワイルドストロベリーという、小さなイチゴの実がなったのを見つけたのだ。

その苗は、私が小学校六年の時、新体操を習うきっかけとなった憧れの先輩がプレゼントしてくれたものだった。うれしいと思う思いと同じくらい、立派に育てなければという責任感のような思いがあった。

その年の夏のはじめ、ワイルドストロベリーの苗に初めて小さな実がなり、その実が赤く色づいた。私は嬉しさのあまり収穫するのを躊躇(ちゅうちょ)した。しかし、枯れてしまってはその方がもったいないと思い、摘み取って口にした。すっぱい小さな実だったので、お世辞にもおいしいとは言えないものだったが、その時の感動は忘れられないものとなった。

翌年の三月十一日。一生忘れることができないであろう、東日本大震災が起こった。

私の家は津波の影響はなかったのだが、一つの大きな心配事があったのだ。それは福島第一原子力発電所の事故による、放射性物質の問題であった。子供である私たちは、外に出ることもできず、マスクをつけて生活していた。引っ越しをするかどうかの家族会議まで開かれた。不安でいっぱいだった。何も変わらないまま月日が流れ、震災の年の夏に、ワイルドストロベリーは前の年よ

りも少し大きな実をつけていた。
私は、その実を食べたくてしかたがなかったが、なにしろ外で育てていたものである。放射線の影響を受けているだろうと思い、食べることはしなかった。
あの日から二年半。今年もワイルドストロベリーは実をつけた。今もなお、立派に成長を続けている。食べられないとわかっていても、父は手入れをしてくれていた。だから父が最初に見つけ、私に知らせてくれたのだった。去年よりも大きな実をつけ、見事な粒となっていた。
ワイルドストロベリーは、私にいろいろなことを教えてくれた。どんなに困難な状況の中でも自分を信じて諦めなければ、必ず成長できる、とその赤い実は語っていた。
あの大震災を経験し、私自身も深い悲しみを覚えた。津波の犠牲になった人、土砂崩れによって命を落とした人、がれきの下敷きになった人な

ど、本当に多くの人が命を落としたのだ。放射線の影響もまだある。しかし、いつまでも被災者だと言っているわけにはいかない。自分の力で一歩一歩前に進まなければならないのだ。

小学校六年生のとき震災を経験した私は、今、中学三年生となり、進路実現のための努力をしている。震災から学んで得た数えきれない経験を胸に、勉強に励んでいきたい。私はワイルドストロベリーのように、強く生きていきたい。

（郡山市立安積中学校　三年　本田　杏美さんの作品）

「ワイルドストロベリーの実」

この時間に考えたことや思ったこと、学んだことを書きましょう。

未来を拓く心のブック選考・作成委員

【監　修　者】

福島大学人開発達文化学類	非常勤講師	佐　藤　光　男

【選考・作成委員】

郡山市立開成小学校	校　　長	吉　川　和　夫
郡山市立金透小学校	教　　諭	佐々木　初　江
郡山市立芳山小学校	教　　諭	柳　沼　信　之
郡山市立赤木小学校	教　　諭	織田島　浩　孝
郡山市立桜小学校	教　　諭	早　川　久　志
郡山市立大島小学校	教　　諭	佐　藤　さとみ
郡山市立小山田小学校	教　　諭	伊　藤　　文
郡山市立朝日が丘小学校	教　　諭	安　部　慶　之
郡山市立高瀬中学校	校　　長	三　輪　晶　子
郡山市立安積第二中学校	教　　諭	春　山　玲　子
郡山市立片平中学校	教　　諭	物　井　　隆
郡山市立郡山第三中学校	教　　諭	柏　倉　弘　人
郡山市立郡山第六中学校	教　　諭	佐久間　志　保
郡山市立郡山第七中学校	教　　諭	折　笠　健二郎
郡山市立富田中学校	教　　諭	積　田　育　子
郡山市立小原田中学校	教　　諭	栗　原　洋　美
郡山市ＰＴＡ連合会	会　　長	瀧　田　　勉
郡山市ＰＴＡ連合会	副　会　長	芦　名　紀　子

〈表紙の絵〉 郡山市総合美術展入賞作品より
奨励賞　郡山市立安積第三小学校　４年　柳　沼　　楓

〈裏表紙の絵〉 郡山市総合美術展入賞作品より
市長賞　郡山市立日和田小学校　２年　山　﨑　琉　海
教育長賞　郡山市立郡山第二中学校　２年　吉　田　有　佑

未来を拓く心のブック

平成26年3月発行

編集・発行：郡山市教育委員会　学校教育課

※文部科学省「道徳教育総合支援事業」の委託を受けて作成しました。

この冊子は、環境にやさしい
植物油インキを使用しています。
紙へリサイクル可。
VEGETABLE OIL INK